

博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） 前田 和泉



学位申請者 鈴木 佑也

論文名 建築プロジェクト・ソヴィエト宮殿の全体像と建設に関する研究：
狂想と国家を双肩に担ったモニュメント

【審査結果】

本論文は、1930年代にソ連の国家的事業として企図された建築プロジェクト「ソヴィエト宮殿」について、その企画が生まれ、4巡に及ぶ建築競技設計を経て実際に建設作業が始まった後、第二次大戦時に一時中断され、1950年代にプロジェクトが最終的に消滅するまでのプロセスを、膨大なアーカイヴ資料に基づいて分析したものである。

ソ連体制の「建築芸術的記念碑」として考案されながら結局は未完に終わったこの幻の建築プロジェクトは、全体主義体制を象徴する事象としてこれまで様々に論じられてきたが、先行研究の多くは競技設計を中心に分析している。これに対して本論文は、このプランが起案される段階から消滅するまでの全過程を時系列に沿って追ひ、各段階における問題点や特色を分析することによって、この一大プロジェクトの全貌を明らかにすることに成功している。分析の結果はソ連建築史や全体主義研究に新たな光を当てるものであり、よって審査委員会は、全員一致で本論文が博士（学術）の学位にふさわしいと判断した。

なお、審査委員会は、前田和泉を主査とし、本学の沼野恭子教授、山口裕之教授、外部審査者として池田嘉郎東京大学大学院准教授、八束はじめ芝浦工業大学名誉教授によって構成され、最終試験（公開審査）は2016年11月13日に本学において行われた。

【論文の概要】

本論文は、本文（191頁）に参考文献リストを加えた204頁からなり、これに参考画像231点を掲載した別冊子（91頁）が付されている。本文の構成は以下のとおりである。

序：建築プロジェクト・ソヴィエト宮殿を取り巻く状況について

1. 十月革命後からソヴィエト宮殿競技設計に至るまでの宮殿型建築物の変遷（1919-1931）
2. ソヴィエト宮殿競技設計とその結果（1928-1933）

3. ソヴィエト宮殿の実現に向けて：ソヴィエト宮殿建設作業とそれをめぐる動き
(1933-1937)
 4. ソヴィエト宮殿の消散：ソヴィエト宮殿建設作業の凍結と中止に至る経緯 (1937-1952)
- 結び

序では、本論文の目的、先行研究の概要と本論文の独自性が述べられている。ソヴィエト宮殿をめぐる従来の研究は主に2つのタイプに分けられる。1つは競技設計案の分析、もう1つは、「全体主義文化研究」など一定の文化的枠組みを設定し、その中でソヴィエト宮殿を考察するものである。いずれにおいてもその主眼は建築競技設計に向けられており、とりわけ当時世界最大規模で実施された2巡目に重きが置かれている。一方で、1933年の競技設計後、実際に建設作業が進められ、1941年に建設作業が一時中止するまでを扱った先行研究は殆どない。さらに、1941年以降も建設作業再開に向けた動きがあったが、これについても先行研究では扱われてこなかった。本論文は、このプロジェクトが起案されるに至る経緯から、最終的にどのような形で中止されるかまでを視野に入れ、具体的な資料を踏まえながら、ソヴィエト宮殿という一大プロジェクトの全体像を捉え直すことを目的としている。

第1章では、ソヴィエト宮殿以前に企画された「宮殿型建築物」の競技設計の系譜が概観されている。ここで取り上げられるのは、具体的には労働者宮殿（1918年）、労働宮殿（1922-23年）、文化宮殿（1930-31年）の3つである。宮殿型建築物はソヴィエト体制の正当性を誇示するためのものであり、規模の大きさと記念碑性が求められた。ただしそれぞれの競技設計プログラムでは具体的な建築様式や設計・表現手法が明確に示されなかったため、参加者は求められるイメージを実験的に設計案へ反映しようとし、その過程で様々な様式が現れた。競技設計告示後にプログラムの変更が行われたり、勝利案が未選定のまま終わるなどの事態は、求められる理念を表現するための確たる手法やスタイルが確立されていなかったこと、さらには主催者の恣意により競技設計の内容が変更されうるものだったことを示している。

第2章では、1924年に「ソヴィエト宮殿」という名称が初めて公文書で言及されてから、1931年にその建築競技設計が告知されるまでを概観した後、4巡にわたる競技設計で提出された設計案でどのようにソヴィエト宮殿が表象されたのか、またその過程でどのような審議が重ねられたのかを辿っている。この競技設計では、2巡目において競技設計後に提出された3案が最優秀賞に選ばれたことや、公開と非公開の回が混在すること、また、当初予定されていなかった3、4巡目が急遽実施されたことなど、公開競技設計としては異例の事態が続出した。競技設計当初からモニュメンタリティは要求されていたものの、何によってそれを表現するかは言及されていなかったため、多様な表現形態が見受けられた。

だが、2巡目以降になって「古典を新しいものとして利用する」という明確な指示があり、設計案にはある程度の共通性が見られるようになる。3巡目では理想のイメージが見出されず、4巡目が行われ、そこで初めて主催者が求める具体的なイメージ（B.イオフアン案）が登場し、勝利案として選抜されることで競技設計は終了する。

第3章では、実際に建築を目指したプロセスでの具体的な動きとその問題点が示されている。建築競技設計終了後、最終設計案作成に向けてこの建築プロジェクトの最高機関であるソヴィエト宮殿建設会議は、頂部にレーニン像を配置することと、「建築物と彫刻の完全な調和」「詳細なプランの策定」を実務機関であるソヴィエト宮殿建設局に求める。これに対応するような内装や、建築物の構造（地盤、基礎、骨組み、荷重等）に関する問題が議論されただけでなく、実際に課題解決に向けた動きが始まっていく。当時の建築界の潮流である「過去の遺産の習得」の影響は、外観のみならず内装、内部空間構成、空間演出にも影響を与え、モニュメンタリティをより強めることとなった。一方、技術的な問題を解決するため積極的にアメリカの建設技術が取り入れられ、「エンジニアと建築家の共同作業時にのみ果たされる半ば工学的な建築物」へと変容していく。ソヴィエト宮殿のイメージを具体化するにあたって、アメリカの建設技術は従来考えられていたよりも大きな影響を及ぼしていた。

第4章では、1937年に最終設計案が提出された後、建設作業が開始されて以降の動きが整理されている。実際の作業が始まってからも、技術的な問題や資材の生産体制と品質管理、予算、組織マネジメントの欠陥などの課題が続出する。1941年に独ソ戦が開戦すると、ソヴィエト宮殿建設作業は一時中断された。ただし、作業グループは疎開先のスヴェドロフスク（現エカテリンブルク）でも設計案の見直しを行っており、プロジェクト自体は存続していた。戦後は、モスクワに一連の高層建築計画が持ち上がり、相対的にソヴィエト宮殿の重要性は薄れていく。幾度か設計案の変更が行われた後、1951年にL.ベリヤがスターリンに対し、レーニン像の位置変更に関する指示を仰いだことが資料から確認されているが、これ以後、ソヴィエト宮殿に言及した記録は見つかっていない。スターリンの死後、1957年に全く新しいプロジェクトとしての「ソヴィエト宮殿」建築競技設計が告示され、これを以て旧ソヴィエト宮殿プロジェクトは完全に消滅した。

結びでは、ソヴィエト宮殿の特徴が以下の3点に整理されている。1)イデオロギー的性質を備えた建築物の集大成であり、国家建築様式の先駆けとなった。2)実際には建築されていないにも拘らず、最終設計案に描かれた姿がその後の都市計画の中心に据えられ、また、当時の絵画や映画に登場することで、モスクワのランドマークとして実現されなければならないという強迫観念を誘い、そのイメージが定着していった。3)その諸特徴により、スターリンを頂点とする価値体系を形成する一翼を担った。1956年のスターリン批判はその「価値体系」との決別を宣言するものであり、それと相前後してソヴィエト宮殿プロジ

エクトが最終的に頓挫したのは極めて象徴的な意味をはらんでいたのである。

【論文の評価】

審査員が共通して挙げた本論文の意義は、まず第一に、従来は競技設計に焦点が当てられていたソヴィエト宮殿を、その前後、とりわけ実際に建設に向けて動いていた段階で、どのように作業が進められ、その中でいかなる問題点が生じていたのかを、膨大なアーカイブ資料に基づき緻密に跡付けた点にある。ソヴィエト宮殿は、当時のソ連のみならずヨーロッパにおいても未曾有の大プロジェクトであり、設計競技以降は、単なる紙上の計画でなく実施に移されるべきプロジェクトとして、技術のみならず生産体制までも含めて国の総力を挙げて推進された。そのために多方面に亘るアメリカの協力を仰ぎ、それが戦後のソ連建築にとって大きな礎を作ったことを鈴木氏は初めて、かつ克明に明らかにした。会議記録から関係者の書簡、各種報告書に至るまで、ソヴィエト宮殿に関する公的文書を徹底的に調査したその労力は驚嘆に値する。ベリヤからスターリンへの書簡など、これまで知られていなかった貴重な資料も発見されており、その意義は極めて大きい。前代未聞の巨大建築物を建設するにあたってアメリカの技術に大きく依存していたことは、先行研究では見過ごされてきた。関係者によるたび重なるアメリカ出張の結果、イデオロギー的には相容れなかったはずのアメリカ文明を象徴する高層ビル群とソヴィエト宮殿の形態が相似するようになったという指摘は、米ソ比較文化史的な観点からも興味深い。技術的側面についても具体的に記述されており、文理融合的研究としても高く評価される。

一方で、審査委員からは以下のような点についてコメントと質問がなされた。

1. ソヴィエト宮殿プロジェクトとその消滅にあたってスターリンが果たした役割について、より深く考察するべきではないか。スターリンは「神に等しい」存在であり、その命令は絶対的であるが、一方で彼は大きな方向性を示しただけであり、技術的な細部については直接的に関与していない。そのため、技術者が現場において創意を発揮する余地があり、そこにこのプロジェクトのダイナミズムが生まれる。その点にもっと踏み込んでほしい。
2. 全般的に詳細に調査されているが、第2次大戦以降、プロジェクトが消滅するまでのプロセスについては少し物足りない。「大祖国戦争」の体験は、戦後ソヴィエト宮殿の意味づけが変化する大きな要因となったはずだが、その点について言及が不足している。
3. 事実を詳細に記述することに主眼が置かれているのだが、その「事実」をどのように位置づけるか、「事実」が何を意味しているかを、概念的な言葉によって明確に示すという点が多少不十分ではないか。
4. プロジェクトを管轄した「ソヴィエト宮殿建設局」が一枚岩で等質の組織として捉えら

れている。実際には内部の人的移動があり、個別の属人的要素もあったはずである。

5. 社会主義国家によって克服されたはずのツァーリズムを体現する「宮殿」という名称があえて用いられたのはなぜか。

6. 歴史学的に不正確な用語がいくつも見受けられる。

7. 予算執行など、公共工事を進める際のソ連の行政手続きについても視野に入れると、なおよかった。

これらの意見・質問に対し、鈴木氏は常に詳細かつ誠実に対応した。たとえば4に対しては、「局長の交替については認識しており、組織の関係者を個別に見ていく必要性も理解していたが、本論文の論旨を明確にするためあえて踏み込まなかった」との回答があり、また5に対しては、共産主義は「全ての歴史を克服した」ことを標榜していたため、過去の歴史遺産を利用することはタブーではなかった、との説明がなされた。質疑応答においては、指摘を受けた課題について鈴木氏がしっかりと自覚していることが窺えた。それらに関して今後引き続き取り組み、さらに研究を彫琢した上で、本論文の成果を単著として公刊してほしい、との要望が審査員から出された。

審査の席上では歴史、建築、思想、文化史など多様な観点から密度の濃い議論が繰り広げられ、予定していた2時間を大幅に超過することとなったが、そうした活発な意見交換を触発したのも、本論文の意義と価値を間接的に裏付けるものと言えよう。

以上、本論文の内容と最終試験の結果を総合的に判断して、審査委員は全員一致で上記の結論に達した。

以上。